

子どももの国語力は
「暗^{くら}読^よみ」で
ぐんぐん伸びる



鈴木信一

著者略歴

鈴木信一（すずき・しんいち）

1962年、埼玉県生まれ。横浜国立大学教育学部国語科卒業。現在、埼玉県の公立高等学校に勤務。2007年、早稲田大学文学研究科派遣研究員。「文芸創作は国語学習のゴールではなく、スタート」をモットーに、詩や小説の創作指導に力を注ぐ。著書に、『800字を書く力』（祥伝社新書）、『文才がなくても書ける小説講座』（ソフトバンク新書）がある。
著者メールアドレス ebo659@yahoo.co.jp

ソフトバンク新書 143

こどもの国語力は「暗読み」でぐんぐん伸びる

2010年9月25日 初版第1刷発行

著者：すずき しんいち
鈴木信一

発行者：新田光敏

発行所：ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒107-0052 東京都港区赤坂 4-13-13

電話：03-5549-1201（営業部）

装丁：ブックウォール

組版：アーティザンカンパニー株式会社

印刷・製本：図書印刷株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。
本書の内容に関するご質問等は、小社学芸書籍編集部まで書面にてご連絡いただきますようお願いいたします。

© Shinichi Suzuki 2010 Printed in Japan

ISBN 978-4-7973-6220-6

子どもの国語力は「暗読み」でぐんぐん伸びる

鈴木信一

ソフトバンク新書 143



はじめに

わが子には勉強のできる子になってほしい。

これは親の自然な願いです。将来どんな職業に就くにしても、学力が邪魔になることはありません。「思いやりのある、心身ともに健康な子」。この理想だって、それを下支えするのはやはり学力なのです。では、子どもはどうしたら勉強ができるようになるのでしょうか。

言語運用能力こそはそのカギを握る、とよく言われます。これは本当でしょう。文章が正しく読めて書けるなら、あるいは、人の話がよく聞けて人にもうまく話すことができるなら、その子は算数だって理科だって社会だって、きつとできるようになります。

幼児期に絵本の読み聞かせをしてやることは、したがって間違いではありません。いえ、本好きな子、言語運用能力に長けた子を育てたいなら、絵本の読み聞かせこそは重要なのです——。と、話をそんなふうに進めたいところですが、ちょっと待ってください。

そもそも、絵本の読み聞かせは、幼児教育の基本としてすでに定着しています。たいていの親はそれを実践し、そのための絵本も世には溢れています。にもかかわらず、子どもの国語力は低下している^{＊1}。

ということでしょう。

——絵本を卒業して活字だけの世界に入ったとたん、本は無味乾燥なものになってしまいうから。

——成長するにつれ、子どもは本よりもゲームやテレビへと関心を移してしまうから。

では、本が無味乾燥なものになるのはどうしてでしょう。子どもたちがゲームやテレビに流れていってしまうのはどうしてでしょう。

だいいち、一方で本好きな子はいるのです。ゲームなどには見向きもせず、本の世界にどっぷりと浸かり、視野を広げ、思索を深めていく子がいるのです。そういう子にとって、本は無味乾燥どころか豊潤な、いわば知の沃野^{よぐや}です。

「読む」ということがいかなる行為かを、親が知らないのです。だから絵本の読み聞かせは熱心にやっても、その弊害を想像することまではできないのです。結果、子どもたちは読書の本当の魅力を知らされなまま、そこから次第に離れていきます^{※2}。

絵本の弊害——。いったい何でしょう。

絵本には挿絵があります。へたをすると、子どもはそれにばかり注意を奪われて、言葉、映像、変換する力を養えずに終わってしまうのです。言語運用能力と言ったとき、言葉を映像化する力はその基盤です。そこでつまずくなら、子どもは大きなディスプレイを扱うことになるのです。

絵本は子どもにとって一定期間必要なものです。ただし、幼稚園の年長さん、ないしは小学一年生ぐらいになったら、絵本からは卒業させて「暗読み^{くらよみ}」に移行すべきです。

「暗読み」とは造語ですが、いわゆる寝床での語り聞かせを指します。子どもが寝るときに一緒に布団に入り、部屋を暗くして、子どもには目をつぶるように言ってやり、おもむろにその日の話を始める。挿絵はありませんから、子どもは言葉だけを頼りに闇の中に映像を

描くことになります。しかし、だからこそ、想像力はこのときフル稼働します。匂いや音、手触りまでが、生々しく感知できるようになるのです。

ところで、「暗読み」には台本がありません。部屋を暗くしますから、何も見ることができないのです。親は暗がりの中で、文字なき本を読み上げる。そういう感覚になります。つまり、あらかじめ知っている昔話や童話か、その場での即興話をすることになるのです。昔話や童話はいいとして、即興話はどうやって作ればいいのでしょうか。

本書の目的は、まさしくそのノウハウを伝えることにあります。ただし、誤解しないでください。お話作りはイコール「読み書きの仕組み」を知ることであり、それは「国語力とは何か」という問いにも通じていきます。すなわち、本書は単なるマニュアル本ではありません。言葉についての一定の見識を得るためのテキストです。

そういう意味では、世の親御さんのみならず、言葉をめぐる諸問題に関心をお持ちの方にも、本書は何らかのお役に立つのではないかと自負しております。

※1 国語力は低下している……………経済協力開発機構（OECD）が十五歳を対象に三年おきに実施している国際的な学習到達度調査（PISA）によると、日本の「読解力」分野における順位は八位（二〇〇〇年）→十四位（二〇〇三年）→十五位（二〇〇六年）と三期連続で下降している（ただし、参加国は三十二カ国、四十一カ国、五十六カ国と増加）。なお、二〇〇三年のPISAの結果が発表されたあと、文部科学省は「大きな課題が示された」として、「読解力向上プログラム」（二〇〇五年十二月）をとりまとめ、「読解力向上に関する指導資料」―PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向―を作成した。二〇〇九年のPISAの調査結果は、二〇一〇年十二月に発表される予定。

※2 読書の本当の魅力を知らされないまま、そこから次第に離れていきます……………二〇〇〇年のPISAの調査結果によると、「趣味としての読書をしない」と回答した日本人生徒は約五十五％であり、参加国中もっとも高い数字であった。

目次

はじめに 3

第一章 「絵本の読み聞かせ」から「暗読み」へ

言葉の本質は何か 14

「絵本の読み聞かせ」の功と罪 17

国語力の差が明らかになる瞬間 21

「暗読み」のすすめ 24

小説家の嘆き 27

第二章 「暗読み」の実際

物語作りは不足を埋めること 34

言ってしまったことを睨む 36

第三章

- 「出たところ勝負」のほうがいい 44
- 「描写」の語りが想像力を鍛える 49
- 物語の流れに屈折を与える 52

「暗読み」で論理的思考力を養う

- 赤ずきんちゃんの本名は？ 68
- 情報の不足に目を向けさせる 71
- 「先読み」の習慣をつける 73
- どうやって活字へ移行させるか 78

第四章

書く力はどう育つのか

- 読み方を知らない人は書けない 84
- 小説が書ける子？ 87

〈本好きⅡ国語のできる子〉とは限らない 90

リレー創作で「先読み」を身につけさせる 95

思うことなど何もない 98

自分が次に読みたいことを書く 105

第五章 子どもと一緒に話を作る

物語をシリーズ化する 110

「なぜなら」「ところが」「なんと」 121

荒唐無稽な話ほど面白い 126

時空を飛ばす 130

タイトルが物語を導く 134

結びつくはずのないものを結びつける 143

第六章 名作を「暗読み」する

暗読みにおすすめの「注文の多い料理店」 152

賢治の思想 155

食べ物を残すことは、なぜいけないか 161

「黒い大きなもの」とは何か？ 164

生きる知恵を名作から学ぶ 167

救いを求めない南吉童話 172

深い諦念を子どもにどう伝えるか 179

心を豊かにする「花のき村と盗人たち」 183

蜜月の時間 189

第七章 古典は格好のテキストになる

水瓶を割ったのはなぜ？ 194

ねずみは誰を婿にもらう？ 197

国守の裁定は？ 199

故事に学ぶ①——虎の威を借る狐 202

故事に学ぶ②——断腸 205

故事に学ぶ③——塞翁が馬 208

第八章 国語ができる子を育てるための生活習慣

言葉と暴力の関係 214

言葉に関してはもっと大人扱いしてよい 216

新語が意味するもの 219

国ぼめ歌 221

「ピーマンっておいしいね」 224

おわりに 227

第一章 「絵本の読み聞かせ」から「暗読み」へ

言葉の本質は何か

情報を伝えるための道具。

言葉をそのようにとらえている人は多いと思います。しかし、言葉の本質はもつと別のところにあります。言葉はまず何よりも、人の認識を助ける道具だということです。

ヘレン・ケラーは、二歳のときに熱病にかかって盲聾啞者もうろうあしやとなりました。目が見えず、耳が聞こえず、口がきけない、いわゆる三重苦に見舞われるのです。以来、家族とは手まねを使つてやり取りをしますが、思うようにならない苛立ちから、癲癇かんしゃくの発作をしばしば起こしたと言います。

生涯の転機は、一八八七年三月三日、あと三カ月で七歳になろうという日に訪れます。ボストンの視覚特別支援学校パーキンズ学院から、アン・マンズフィールド・サリバン先生が家庭教師としてやってくるのです。

先生が最初にやったことはただ一つ。ヘレンに言葉を教えることでした。

と、ここまで書くと、やはり言葉は情報や意思を伝える道具として欠かせないのだ。サリ

バン先生は、だからヘレンに言葉を教えたのだ。そう思うかもしれませんが。しかし、そうではありません。あの有名なエピソードの場面を、彼女の自伝から引用してみますので、読んでみてください。

私たちは、スイカズラの香りに誘われて、それにおおわれた井戸の小屋に歩いて行きました。誰かが水を汲んでいて、先生は私の手を井戸の口にもっていきました。冷たい水の流れが手にかかる、先生はもう一方の手に、はじめはゆっくり次に速く「水」という字を書かれます。私はじっと立ったまま、先生の指の動きに全神経を集中します。突然私は、なにか忘れていたことをぼんやり意識したような、思考が戻ってきたような、戦慄を感じました。言語の神秘が啓示されたのです。そのとき、「W・A・T・E・R」というのは私の手に流れてくる、すばらしい冷たいなかであること知ったのです。その生きた言葉が魂を目覚めさせ、光と望みと喜びを与え、自由にしてくれました。

（『ヘレン・ケラー自伝』）